

雜集論に於ける藏・漢兩所傳

高 崎 正 芳

- 1 Abhidharma-samuccaya (Asaṅga) 555d) = チュベト譯パーシヤ。
ゾーカレ教授及びゾラダソ氏の梵文テキスト^③ = 梵文
集論。
 - 2 大乘阿毘達磨集論 無著造 玄奘譯
(大正 No. 1605) = 漢譯集論。
 - 3 Chos mñon pa kun las btus pa. Thogs med
(Asaṅga) 造。Jinamitra, Śilendrabodhi, Ye 'ses
sde 譯 (影印北京版 No. 5550) = チベツト譯集論。
 - 4 Abhidharma-samuccaya-bhāṣya (JBORS,
Ms title No. 86 ビハール研究所々藏の梵文寫眞版)
= 梵文パーシヤ。
 - 5 Chos mñon pa kun las btus pañi b'sad pa.
Rgyal bahi sras (Jinaputra) 造。Jinamitra,
Śilendrabodhi, Ye 'ses sde 譯(影印北京版 No.
5554) = チュベト譯パーシヤ。
 - 6 大乘阿毘達磨雜集論 安慧緣 玄奘譯
(大正 No. 1606) = 漢譯雜集論。
 - 7 Mñon pa chos kun nas btus pahi rnam par
b'sad pa. Rgyal bahi sras (Jinaputra) 造。
Jinamitra, Ye 'ses sde 譯。Ni ma rgyal mtshan
dpal bzah po 校訂 (影印北京版 No. 5555) = チベ
ツト譯ビヤークヤー (ビヤークヤーはチベツト譯音
寫タイントル ADS Vyākhyā による)。
以上は現在やる區別藏經集論の本文と藏論と⁴及びそ
の關係がその一回をやらねばならぬ註釋との校・藏・漢の
標本である。
- 藏論が無著の梵文であるところから上掲の諸藏經傳
の一致についてはいへば、漢譯雜集論⁵、チベツト

譯ビヤークチャー及び梵文・チベット譯兩バーシャに於て、その造者の明確でない點がある。漢譯雜集論では「安慧菩薩釋」とのみあつて、その傳承によれば、無著の本論に弟子師子覺が釋文を附し、本釋各々別行していたものを安慧が參釋したという。チベット譯ではビヤークチャーもバーシャもジナプトラ（最勝子）造となつている。所傳では、チベット譯の素材となつたサンスクリット原典はもと本釋を容有していたものであつたが、分離して別行になつたのであると語つている。現存する梵文バーシャには造者の名前は認められないようである。そのMSの寫真を用いて研究したゴーカーレ教授もプラダン氏も、MS中に造者名を見出したということ述べていない。近來の學者の間に於ても種々にいわれている。チベット譯の示す造者に不確かな點があるという説。安慧の唯識三十頌釋論と集論との文が、ある部分に於てよく類同するところから、その兩者の同一性を求めて、集論に對する註釋者も安慧であるとする説。更に漢譯の傳承と共に、チベット譯の註釋者を參考のために出しているなどがある。(6)今この小論に於ては、チベット譯及びその所傳、漢譯及びその傳承、兩者の相異と關連性などについて述べていくこととする。

チベット譯の現存三本の中、本論とバーシャとは、九世紀前半に活躍したジナミトラ、シーレンドラボォデイ及びエシエデの譯出となつている。同様にビヤークチャーも一度ジナミトラとエシエデによつて譯出されているのである。しかしそれは、その後チベットのサンスクリット學者、Sakyaの Ni ma rgyal mtshan dpal bzang po (Sūryadhvaja-srihadra) に於て校正されている。チベット譯のあと書きに、校正者が次のようにいつている。

この本釋の二は、古えの教法を守護する自在なる人々の恵より、大譯官、大パンディタなる學識者たちによつて、よく譯し刊定したのであるけれども、しかしながら、インドの書〔論〕の爲の註釋の中に、本論の語の完備してあるものと、或る項目について註釋を分けたものと、同じく問答と關連する句を分けたものと、註釋の語を前後過剰に譯し増加して譯したものと、註釋の語のままではなく意味のみを攝つて譯したものと、略説と廣説とが良く配當せられずに譯したものと、自らが改變して集めた偈が造られたものなど、いくらかの缺點を見出される。

そこで再びインドの書と一致せしめて多聞の譯官、
シャーキヤの比丘ニマギェンツェンペサンボが、大
伽藍 Dpal ther pa glin に於ていきさかの確に修
正した。と。

ここに校正者は、先づチベットに傳つたサンスクリッ
ト原典の各々の様相(分離ということに注意せしめられ
る)について述べ、次に前に一度翻譯されていたものを再
び修正することに對する見解を述べているわけである。
この校正者のいうところを念頭に於て、今現存するチベ
ット譯の三本を對讀してみると、次のような點がわかる。
A、ビヤークチャーの最初にある偈文及びその解釋が、
パーシャにはなく、同様に本論にもない。B、パーシャ
には本論を含んでいないが、その文脈はいわゆる「問答
と關連」する關係のものがあること。

翻譯上の問題としては、例えば、

The tshom med pas ji ltar dmigs pa la sems
rtse gcig pañi tshul gyis bde bar sems mñam
par hñog pañi phyr ro \ (ビヤークチャー)

The tshom med pas hdi ltar ran gi dmigs pa
la rtse gcig pañi tshul gyis bde bar sems mñam
par hñog pañi gnas kyi rjes su mñun no \ (パ
ーシャ)

或は「論議」に當るところが、ビヤークチャーでは yan
dag pañi gtam であり、パーシャでは hbel bañi gtam
である。といったような例を時として見出すのである
が、ビヤークチャーと本論とに於ても同様である。
尙それらについては、漢譯もあることであるから、當
然双方の對比も必要であるが、今當面の A・B につい
て、試みにチベット譯ビヤークチャーを譯しつつ、その様
相を述べてみたい。

聖なる説法の自在者に敬禮し奉る。

證悟が決定して無垢なる處が對象となつており
聖行の海の彼岸に往き

一切法に自在となり、不思議なる

調伏の方便をもつて〔衆生〕を引導することを
有し。

無量に殊勝となれる功德が

自と他との二利を所依とせる

佛と法と聖衆とを

當にその故に敬禮し奉る。

經を解釋する語であつて

論に攝せられた (sañgrhita) も

また〔論によつて〕分別せられた (vibhaktā)

も

並びに諸の難解なるものをも解説しよう。

これらの偈は、三寶の功德の廣説せられたものを近く集めて敬禮し及び經の解釋を造るものとなりたもう。それは所應に随つて、廣説を集めて敬禮する人があるとき、及び經の釋が造られたるとき、それは、他の論の所依を遍く集めるからである。

その中、佛薄伽梵は契經と應頌と記別などの凡ての説法に於ける所依である。論師は、自ら法の眞實性を現觀する如くに、それによつて、直ちに稱讃せられる〔位〕に入る。〔それは〕彼〔論師〕にとつて、この様相にて示されたものは、聖なる弟子衆に住してもはや退轉しない法界の處性の等流であるからである。また經の解釋をなしたまえる人々が、世尊の大いなる功德の一法を説いたときには小慧の人たちは、聞と思と修との尋求に依つて随入して論を造るからである。

その中、初の二偈を以て、世尊正等覺者の六義を顯示する。〔六義と〕は自性と因と果と事業と相應と起行とである。その中、先づ證悟が決定し無垢なる處が對象となつてゐるとは、これによつて自性を顯わす。佛世尊は一切種に住する遍通(Parinivesa)する相であるからである。聖行の海の彼岸にゆきと

は。これによつて因の義を〔顯わす〕。諸菩薩は、極喜〔地〕等の十地の一切種に無邊なる行を無數劫時に修習する因によつて練達していくからである。

一切法に自在なるとは、これによつて果の義を〔顯わす〕。習氣を具する無邊なる煩惱と所知との障を除くが故であり、また無上となれる功德の圓滿せる菩薩の果を得ることは、一切法に對して自在を得ているからである。不思議なる調伏の方便によつて衆生を引導することを有するとは、これによつて事業の義を〔顯わす〕。一切智によつて過去の凡ての境を説く〔教誡論〕と、神通〔輪〕と隨説〔記心輪〕との神變等の無量の調伏する方便によつて調伏して、有情の心界を清淨に調御するからである。無量に殊勝となれる功德がとは、これによつて相應の義を〔顯わす〕。尋と伺とから超越せる利益の殘無き品類を以て難行の出離と、無上の大悲と、力量と無畏などの法實に相應するが故である。自と他との二利を所依とせるとは、これによつて起行の義を〔顯わす〕。自と他との二利に住する相の故と受用身と變化身と自性の如來身とは、理の如く、主勝なる自利を所依とし、無邊にして主勝なる他利を所依とする。所依とは、身を示すの義である。二を所依とな

すとは、主勝なるように扱われることである。受用身は諸佛の自利の主勝である。諸大會衆の間にあつて、彼は受用身を以て歡喜して甚深なる法の受用を、順次に次々と受用するからである。他利の主勝であるかの〔變化身〕は十方一切の世界に於て、各々適當に工巧等の諸變化を以て有情の作すべきことを成就していくからである。自性身なる如來は、凡てと共通なる法身であり、眞に微細なる一切の障を眞如の所依に於て轉じた相であり、主勝なる自利の未得なるものを得しむる等である。如來の身の差別は〔かくの如く〕三種に起行する。

當にこの同じい讚嘆によつて、法と僧との功德をも説示するものと知るべきである。自性と因と果との義に因つて法實の〔功德を説く〕。彼〔法實〕は學と無學との分離の爲に僧實の〔功德を説く〕。諸の學者が了悟し易い爲に論の體を設定したまうのである。

以上である。A。また續いて次の偈と釋などが含まれており、以下はBに關係する。

幾ばくかと、何の故にと諸取〔蘊〕と相とそれの設定と

次第と義と、喩と分別と、

攝等の四は。

當に攝等によつてそれらと關連を具す決擇との四分類であり

諦と法と得と論議を

決擇の區分とし

集合に共通なウダーナである。

これは、本論の最初に當る偈頌であつて、パーシャには含まれていないものである。そしてこの偈に續く

何の故にこの論を著はしたか。それは蘊等に關してである。幾ばくかと何の故に云々は、思擇の處に善巧ならしめん爲に關説せられているのである。ということとは、この善巧によつて善く二種の稱讚利益を得るのである。作意の稱讚利益と正しい論議を決擇する稱讚利益とである。その中、作意の稱讚利益は、奢摩地に隨順すると毘鉢舍那が増上することに隨順するのであると知るべきである。奢摩地に隨順するとは、これらの處に善功がなされたときには、疑が無きによつて了得せる如くに心一境の仕方によつて容易に心が等持するからである。毘鉢舍那に隨順するとは、多くの形相にて知るべきものを觀察して、慧が殊勝ならしめられるようになるからである。正しき論議を決擇する稱讚利益とは、これらの

處に善巧なることによつて、一切の問を解説する力を具するによつて無畏が得られると見るべきである。

という文が、パーシャの始めに當つている。そして以下問答相關の文句がパーシャとしてまた本論として分けられている。一例を示すと

(本論) 作意とは何であるか、心の起行することである。所縁に於て心を持つる業あるものである。

(パーシャ) 所縁に於て心を持つるとは、それら〔所縁〕に於てしばしば〔心が〕引かしめられるのである。それ故に作意を得る者は三昧を得ると説く。

以上である。全くかりそめな和譯に過ぎないが、たゞニマギエンチェンペンサンボの記述するところを理解するために、チベット譯の分離という様相についてその一端を示してみた。

二

次は玄奘譯の雜集論についてであるが、その和譯は筆者のよくするところでない。先に示したチベット譯からの文に對應するところの中必要な部分を、原文のまま摘出す。

諸會眞淨究竟理 超聖行海昇彼岸

證得一切法自在 善權化導不思議
無量希有勝功德 自他並利所依止

敬禮如是大覺尊 無等妙法諸聖衆
敬禮開演本論師 親承聖旨分別者

由悟契經及解釋 爰發正勤乃參綜

今此頌中無倒稱讚最勝功德敬申頂禮。以

供養三寶及造此論經釋二師隨其所應。所

以者何。此論所依及能起故。佛薄伽梵是

契經等一切教法平等所依。無師自悟諸法

實性。一分教起所依處故。從此無間聖弟

子衆依法隨學法爲依者。法界所流故。經

釋二師亦契如來所說正法。一分無倒聞思

修行。爲依止故隨而造論。(中略)當知此

中亦讚法僧功德。法實者。自性因果等義

所攝故。僧實者。隨此修學所生故。庶令

學者無諸怖畏。方造論端建茲體性。

以上の玄奘譯で「敬禮開演本論師親承聖旨分別者。由悟契經及解釋爰發正勤乃參綜。」の二句は、漢譯の傳承と密接に關係しているのである。大慈恩寺沙門基撰、大乘阿毘達磨雜集論述記卷一の記述によると、無者が「開演の本論師」に當てられ、無著の門人師子覺が「親しく聖旨を承けて分別する者」に當てられている。「契經」

は無著の集論がよく契經などの本經を集めたものであり「解釋」は義が無著で文が師子覺であつて、師子覺の釋と本論とでは言意に異るところがあり、また參糅以前は本・釋對比していた。それでは本・釋の理解に困難なために、遂に兩文を參糅し一部とするというのが「發正勤乃參綜」の文意である。そして參糅者は安慧であり安慧が參糅の意を叙したのが、偈及びその釋文の「方造論端建茲體性」までであるとも述べている。⁶⁴ こうした慈恩大師の解釋が、無著・師子覺・安慧という漢譯の傳承を生み、それは成唯識論の中に於いても同様に解釋せられていた。

以上は漢譯の傳承についてであるが、それと先に示したチベット譯の所傳とを考察すると、各々の見解が明らかになつて来る。漢譯の傳承が、雜集論の始めの偈と釈文とは安慧であるというように、參糅を立てるかぎり參糅者と本論造者との以外に釈論の作者を必要とする。チベット譯の所傳では、本釋が一本となつてゐるものと、各々の型で分かれたものがあるといふ、現存のチベット譯は既に記したように、「分離」した様相をもち本論に對する釋論の造者を示している。ところがその釋論の造者が、一方は師子覺であると傳え、他方は最勝子であると示している。つまり漢譯傳承で語られる釋者師子覺は、漢譯の釋論がないのであるから、それ

はただ述記などの傳承に依存していわれているわけである。また師子覺については西域記に傳があるが、無著の弟子であつて、その入寂は無著に先立つてゐるとせられてゐる。チベット譯の示す釋者最勝子は、現存する釋論に附せられてゐるのであつて、それよりすれば釋論の造者、最勝子ということになる。また最勝子 *Pañyal*

Pahi-sras (*Jinaputra*) については、瑜伽論七十五に見えてゐる解深密菩薩の最勝子。大乘莊嚴經論、安慧・無性の復註歸敬偈に見えてゐる彌勒菩薩の勝者子など、更に西域記に傳える瑜伽師地論釋を製した慎那弗阻羅。成唯識論述記一本でいう護法菩薩の門人の辰那弗阻羅がある。次にチベット譯のビヤークヤーがパーシヤと同様に最勝子を附しているのに對して、漢譯雜集論では安慧糅とする。この點についてはどうであらうか。先に試譯したチベット譯の偈及びその釋偈の文意は、その作者をも含めて三師の關係があとづけられてゐる。漢譯の場合に於ても同様であるが、今それらの偈文及び釋偈文の内容を簡潔に示すと、佛一經一論一師一解一論一分別者と釋文の作者となる。チベット譯三本の造者名は、本論は無著、パーシヤとビヤークヤーとを最勝子とするが、それは今いうビヤークヤーの内容の文意と趣をやゝ異にしてゐる。

次に漢譯傳承で云う「參糝」説についてあるが、偈文の「爰に正勤を發して乃ち參、綜せん」が參糝の意味であるという。チベット譯の偈文からは「諸の難解なるものを解説しようという」意味に取れる。更に離集論述記には「雜」の義について説明したのち、「本釋別行難知性相文義頗廣難可受持故、綜參和令其易入由斯論首標以雜名參糝雜」云々と述べ、論の標題も亦參糝に關連しているとする。この點についてはどうであらうか。チベット譯が傳えるサンスクリット名は、Abhidharma samuccaya-vyākhyāでチベット譯では Rnam par b'sad pa がジャークヤーに當る。チベット譯本文の上で「經の解釋」という場合には「Rnam par b'sad pa を用いており、漢譯の「經及び解釋」、「經釋」に相當している。本文の語及び論の性格と相應して、ジャークヤーが論名となつていることは云うまでもないが、論自體の終りに、チベット譯は

この論は何の故に阿毘達磨集といわれるか。
深入して攝するが故である。あまねく集めるが故である。正見の所依であるが故なり。

この論は、何の故に阿毘達磨集との名が設けられたかといえ、訓釋の方法によつて深入して攝するが故であり、諸の菩薩が眞實性の現觀として證する

ことによつて略集(要言)すればという意味である。あまねく集めるが故にというのは、阿毘達磨の經から、一切の思惟の所依を攝するが故にという意味である。正見の所依であるが故なりというのは、不轉倒なる方便によつて佛果に至るまで得しめるが故であるという意味である。

と述べている。次に漢譯の論名についてあるが、今チベット譯を參考にして理解する方がより具體的な意味を把握し易いと思うので、これによりつつ説明して行かう。漢譯の論名は雜を立てる。その雜の義も亦本文の語及び内容からいわれることである。最初の偈とそれに續く釋偈に、「所應に随つて、廣説を集めて敬禮する人があるとき、及び經の釋が造られたるとき、それらは、他の論の所依を遍く集める (samuccaya, sam-ud-ye) が故である。」とあり、論の終りに「あまねく集めるが故に」というのは、阿毘達磨の經から、一切の思惟の所依を攝するが故にという意味である。」というのがある。そういう意味に於て雜の義を理解することが出来る。雜阿含の義について瑜伽論が「彼の一切事相應の教を闡別し鳩集するが故に雜阿笈摩と名づく」と云う如くである。次に「本釋別行」に關してであるが、漢譯傳承のいうところは、本論に對して釋論の意味が異つている場合が

あり、更に合様される以前に於ては二者別行していたとする。その中、本論と釋論との意味がいく分異つて示されている点のあることは、雜集論を理解して行く上で認められる。例えば「又餘の經に説く。菩薩摩訶薩は、五法を成就せば、梵行者第一の清淨の梵行を成就すると名づく。云々」とある本文に對して、釋論では違つた解釋の態度を取つてゐるがごとくである。一方別行の原典があつたということに於ては、「分離」説に立つチベットの譯の所傳も同じである。更に現存する梵本も亦別行のものである。ところでこの二つの梵本では、チベット譯の「分離」の様相を止どめてゐるようである。プラダンの研究によれば「漢譯にもチベット譯(兩本論)にも見當らない文句が本論原典に見えており、しかもそれが稀ながらパーシャに認められるということは眞に奇妙である」と述べてゐる。その章句についての例文も出している。現存梵文のこうした型態は、そこに一類の分離の様相を有していると見ることに於て、説明せられるであらう。二つの梵本はラーフラ・サンクリトヤーヤナ氏がチベットに於て發見したものであるが、チベットに傳つたサンスクリット原典には、分離という様相の各々獨自の型があつたといえるであらう。

以上のことがらを要略すれば

本論—無著(梵・藏・漢)、パーシャ、ビヤークァー
—最勝子(藏)。

本論パーシャ別行(梵・藏・漢)、パーシャ師
子覺、雜集論—安慧様(漢)となる。

その中、玄奘譯の傳える「安慧菩薩様」は認められるであろうが、漢譯述記の傳承でいう參様説の一部に従いえない點もある。同様にチベット譯ビヤークァーの内容と、造者の關係についても尙考究の餘地がある。それらは、他の諸經論との關連の上に考察されねばならない問題であらう。

註

- (1) V. V. Gokhale, Fragment from the Abhidharmasamuccaya of Asanga, JRS, Vol. 23, 1947. Pralhad Pradhan, Abhidharmasamuccaya of Asanga, Visva Bharati Santiniketan, 1950.
- (2) 大乘阿毘達磨雜集論述記卷第一、大慈恩寺沙門 基撰 卅藏七拾四套、第四册。
- (3) チベット譯ビヤークァーのあと書き。北京版・第五七函・三六二の上參照。
- (4) 印度哲學研究第五卷・一四一頁。
- (5) プラダンの前出書一七頁—一九頁。ゴーカーレ教授は先に Ya'somitra を想定し A rare manuscript of Asanga's Abhidharmasamuccaya, HIAS, Vol. 11, 1948. され

を前出論文に於て訂正し、漢譯によつて安慧であるとしてい
る。

- (6) これに關してはいくつかの辭典類及び論文もある。
- (7) チベット譯ビヤークチャー・三六二の上・一行―六行。
- (8) チベット譯ビヤークチャー・一四五の上・五行―六行。漢譯雜
集論・大正三一卷・六九五の上。
- (9) チベット譯パーシヤ・二の上六行―二の下一行。
- (10) チベット譯本論・五一の上・四―五行のチベット譯は、ビヤ
ークチャーの用語・構文と一部同一でない。それは後者が校正さ
れた譯であるからである。漢譯集論では大正三一卷・六六三
の上。プラダン氏の還元梵文は前出テキスト第一頁。
- (11) チベット譯パーシヤ・一の一行―二の下・三行。尙以上の和
譯はビヤークチャー・一四三の下・三行―一四五の上・七行よ
りのもの。
- (12) チベット譯ビヤークチャー・一五二の下・一―二行。パーシヤ
・六の上・一―二行。集論五五の下・五―六行。(漢譯雜集
論大正三一卷・六九七の上・中・集論大正三一卷・六六四の
上)。梵文・プラダン氏テキスト第六頁。
- (13) 漢譯雜集論大正三一卷・六九四の中・下。
- (14) 雜集論述記卷一・卅藏七四套・第四册三〇九・三一五參照。
- (15) 大唐西域記・大正五一卷・九三七の下。
- (16) 瑜伽師地論・大正三一卷・七一三の上。
- (17) 山口益博士・中邊分別論釋疏・序論三一頁參照。
- (18) 大唐西域記・大正五一卷・八九六の下。
- (19) 成唯識論述記一本・大正四三卷・二二二の上。
- (20) 雜集論述記卷一・卅藏七四套・第四册三〇七。
- (21) チベット譯ビヤークチャー・三六一の下・四行。集論・一四一
の上・八行・一四一の下・一行。(漢譯雜集論・大正三一卷・
七七三の下―七七四の上。集論・大正三一卷・六九四の中)。
プラダン氏のテキスト(還元)第一〇九頁。
- (22) チベット譯ビヤークチャー・三六一の下・四―八行。パーシヤ
・一四三の上・六―八行。(漢譯雜集論・大正三一卷・七七三
の下―七七四の上)。
- (23) 瑜伽師地論第八五卷・大正三十卷・七七二の下。
- (24) 漢譯雜集論・大正三一卷・七七三の下。集論・大正三一卷・
六九四の中。(チベット譯ビヤークチャー・三六一の上・四行
―三六一の下・三行。同パーシヤ・一四三の上・一―六行。
同集論・一四一の上・六―八行)。
- (25) プラダン氏のテキスト本 Introduction p. 15.
難解なチベット文解讀の上で、山口益先生の御教示をいただ
いた。深く感謝いたします。
(二十八年度文部省各個研究費による研究成果の一部)